

「朝鮮螺鈿の美」展によせて

大和文華館「螺鈿葡萄文衣裳箱」と 朝鮮美術に見る葡萄の表現

朝鮮半島の漆工芸は螺鈿による装飾に優れ、花唐草文様や吉祥の意味を持つ動植物、山水図などがあらわされた魅力あふれる作品が作られています。

高麗の元宗13年(1272)には、皇后発願による『高麗大藏経』を収める螺鈿経箱を制作するために「鈿函造成都監」が設置され(『高麗史』卷27、『高麗史節要』)、現存する高麗時代の螺鈿経箱は器面に菊花文や、菊または牡丹唐草文様で覆う細密な文様表現が見られます。これらには、細かく切り出された貝殻と金属線が嵌装される精緻な技術がうかがえます。

朝鮮時代には高麗螺鈿に文様の系譜を継ぐ花唐草文様が拡大され、文様は明快にあらわされるようになります。「螺鈿花唐草文箱」(図1 朝鮮・18世紀 高10.5×29.1×29.1cm 大和文華館)では蓋上と側面の全面に宝相華および牡丹が配された唐草文様が並び、大きく切り出された貝片に亀裂を入れて嵌装する割貝技法が用いられています。宝相華文・牡丹文・葉文は同形が用いられ、紙型などの型に沿って貝が切り出されたことと見られます。



図1 螺鈿花唐草文箱 大和文華館



図2-2 部分

図2-1
螺鈿葡萄文衣裳箱
大和文華館図3 葡萄図
李繼祐筆
大和文華館図4-1 鉄砂青花葡萄文
大壺 大和文華館

図4-2 部分

2022年度に修理を終えた「螺鈿葡萄文衣裳箱」(展覧のお知らせ左下図・図2 朝鮮・16-17世紀 高13.0×72.0×43.0cm 大和文華館)は、蓋の側面に宝相華唐草文が、そして蓋上には画面いっぱいに垂れ下がる葡萄の枝が蝶や蜂とともにあらわされ、現存する朝鮮螺鈿の中でもひととき作画性の強い作品です。

蓋上の図案は「葡萄図」(図3 李繼祐(1574-1646)筆 95.8×46.8cm 朝鮮・16-17世紀 大和文華館)や「鉄砂青花葡萄文大壺」(図4 高37.0cm 胴径30.2cm 朝鮮時代 大和文華館)に描かれた葡萄図に近く、墨葡萄図との関係や中国の草虫図の影響が既に指摘されています。

「葡萄図」(図3)では枝が大きく湾曲して垂れ下がり、葡萄の実の重なりが墨の濃淡と暈かしによって描き出されています。枝は力強い筆さばきで渦を巻くようにうねり、枝先に向かって細くなっています。葉の表現は豊かで、重なり合っただけで葉が破れ、朽ちていく様子がダイナミックにあらわされています。

「鉄砂青花葡萄文大壺」は鉄砂(鉄絵)と青花を併用する絵付けの技法により、葡萄が壺の周囲を一巡するよう

に、胴の上部から枝分かれしながら伸びています。低く立ちあがる口部に柔らかく膨らむ大らかな器形には、朝鮮王朝時代中期の特徴が認められます。以上の3作品には、葉を付け、たわみに実る葡萄の枝が躍動的に構成され、色彩を抑えて巧みにあらわされる点において共通します。

葉の表現に注目すると、「螺鈿葡萄文衣裳箱」(図2)と「鉄砂青花葡萄文大壺」(図4)では、しなやかな枝の動きに対して、葉の形状が型の繰り返しであることに気づきます。部分拡大した図2-2では、正面向きと斜めから見た二種類の型の繰り返し使われ、左右の向きを変え、また大きさを変えることで変化が付けられています。図4-2では、正面向きの同じ型が大きさを変えて繰り返しあらわされています。ただし、前者では蝶や昆虫、絡みつく蔓が配されて装飾性豊かに構成され、後者では鉄砂や葉脈のみに添える青花の溜まりが微妙な濃淡となることで、繊細な表情が生み出されています。

絵画的な葡萄の表現が認められる一方で、陶磁器への絵付けおよび螺鈿では、葉の表現などで同様な形が繰り返され、特に螺鈿技法では、絵画的な図案においても、紙型などの型が用いられたと考えられます。

さらに、貝の表面に光が反射して現れる淡いピンクや緑色の光彩がとくに美しい「螺鈿葡萄文衣裳箱」(蓋上：図5

朝鮮・17-18世紀 高17.8×48.0×76.5cm 東京国立博物館)では、葡萄は箱の身側面の下部から伸びる姿があらわされますが、葡萄の枝は複雑に絡み合い、枝の線に規則性はありませんが、反復して広がるように蓋の表面が文様で覆われています。枝の間には童子が遊ぶ姿が見られ、葡萄と童子を組み合わせた子孫繁栄の意味を持つ吉祥文様です。葡萄の葉や童子の形はやはり紙型などの型が用いられたと考えられ、葡萄の葉の切れ込みがある形は五枚の葉が連結されたようにあらわされますが、同形が並置され、童子は三種類の形が繰り返し用いられています。

東アジアで好んであらわされた葡萄文は、中国では栗鼠と組み合わせられた吉祥文様として多くの絵画や陶磁器に見られます。中国・明時代(16世紀)の「螺鈿葡萄栗鼠文箱」(図6 高12.8×9.9×19.5cm 東京国立博物館)では、葡萄の枝が箱の表面に自在に伸び、葉と実が一単位であらわされています。枝の根元に坐る栗鼠は愛らしく、蓋上の枝のうねりが「福」字を象っていることから、豊かに実る葡萄が吉祥の意味に満ちていることが伝わります。

本展覧会では、東アジアにおける葡萄文の表現を比較し、また朝鮮螺鈿のその他の文様の系譜についても御覧いただきます。(瀧朝子)



図5 螺鈿葡萄文衣裳箱 東京国立博物館

図6
螺鈿葡萄栗鼠文箱
東京国立博物館

季刊 美のたより No.224

令和5年9月29日

発行 大和文華館